学校づくりの記Ⅱ

校長通信

発行日　６月８日

No.１１

「困り感」をもつ子を見つめる

教師から見て困った子は、実は『困っている子』なのだ」その子の困り感に寄り添う支援が大切だ」と言うは易く、そのスタンスで実践することは本当に難しいことだと、最近つくづく思っています。

学校を回っていると、あちこちで学習から外れている子を目にします。そのまま通り過ぎることもできず、

「どうしたんや。」

と声はかけるのですが、それ以上どうしてやることもできず、ふがいない自分を情けなく思うことの連続です。

先日、二年生のミュージフェス練習の様子を見せてもらいました。いい声で歌っているし、全体としてはよく集中しているのに、何人かは全く外れた動きをしています。中でも目立った動きをしていたのが支援学級のR君。みんな揃って鍵盤ハーモニカを演奏している横で楽器を勝手に鳴らしたり、ステージをうろついたり……。決して頭ごなしに叱っておられない先生方の対応をすごいなあと思いながら私ができることも見つからず、ただ見ているしかありませんでした。

やがて、合奏練習になりました。めいめい楽器をとりに行く時、さっとR君もトライアングルを楽器置き場から取り出しました。またあれで遊ぶのかな、と見ていると、なんと、歩き回りながらですが、ちゃんとみんなの合奏に合わせてトライアングルをたたいているのです。

（やっぱりR君も　参加したい」という気持ちを持っているんだな）と確認できたことがうれしかったです。そう考えてみると、前段のふざけ行為も、鍵盤ハーモニカへの苦手意識から来るものだったのかなと思えるようになりました。

同じく外れていたK君。二年になっても落ち着かない状況が続いています。友達のめんどうみがいい「いいやつ」と思っていただけに、どうしてあんなにじっとしていられないのだろうと不思議でした。

金曜日、O先生から、「K君が初めて、私に家のことを話してくれたんです」と聞きました。そして、K君が家族のことでずいぶんつらい思いをしているのだということを知りました。人の気持ちを敏感に感じるK君だからこそ、その苦しさでいっぱいいっぱいになっているのでしょう。

四年の少人数授業の教室をのぞきました。先生が説明しているのに、一番後ろの席に座っているT君は、ノートも開けず、前の席の子をつついてふざけています。そっと横に行って、

「ノート開けて」鉛筆出して」と言うと、割と素直に用意しました。

黒板の問題を一つ、ノートに書いてやり、一緒に計算しました。三桁÷一桁の筆算です。とちゅうで

「これ、どうするの？」

と聞いてきます。T君は、まだ筆算の手順が十分分かっていないようでした。それで、あと二つ黒板の問題を書いてやり一緒にやっていると、何とかやり方が飲み込めてきたようで、次の問題は自分でやりました。

「もう、これで先生の話も分かるよ。」

と言って教室を出ました。T君も「分からない→できない」苦手意識がふざけ行為に出ているのだと思いました。

その子の困り感の背景が分かったとしても、集団学習の場面で一人の指導で、どうしてやりようもないという状況はいっぱいあり、それはしかたのないことだと思っています。ただ、どうしてやることもできなくても、

君の困っている気持ち、しんどさは分かるよ。何とかしてやりたいと思っているよ。」

という教師の思いだけでも子どもに伝わるようにしてやりたいと思うのです。

六年のAさんがいじめとも言えるようなしうちをクラスの仲間から受けて「転校したい」というほどに苦しんでいるということが保護者からの連絡で分かりました。

N先生が、すぐ家庭訪問し、Aさんのつらい気持ちを聞き取ってくださいました。そして、

「せったいにAさんのことは守るからね。」

と伝えられました。

そのことがAさんの心を軽くしたのか、次の日、すっかり表情が明るくなったとのことでした。

自分の気持ちを受け止めてくれる大人が一人いるだけで子どもの姿は変わる。」と聞いたことがあります。まさに、そのとおりなんだなと、Aさんの事例を聞いて思いました。